

問 答
 右側ニ行キマス
 太陽カ射手ノ右側ニアツタ片ハ
 右側ニアレハ左へ行キマス是ハ太陽ノ光リテ照星ノ右側ト照門ノ
 左側トカ光リマシテ實物ヨリ大キク見エマス此大キク見ヘマス儘
 照準シマスレハ照準ハ善ク出來タト思フテモ本當ノ照準線(即チ
 銃口)ハ左ノ方へ着テ居リマス夫レ故左ニ行クノチス
 問 答
 太陽左側ニアレハ
 彈丸ハ右へ偏避マス(其理由ハ前ト反對)
 問 答
 太陽直上ニアレハ
 彈丸ハ下リマス
 氣候カ暑熱ノ片ハ
 彈丸ハ上リマス之ハ空氣カ膨脹シテ稀薄トナリ彈丸ニ抵抗スル力
 ガ弱クナルカラデアリマス
 寒氣強キトキハ

問 答
 下リマス(其理由ハ暑氣ト反對ナリ)
 雨ヤ雪ノ片ハ
 下リマス其譯ハ空氣ガ重イ爲メ彈丸ノ勢ガ弱クナルカラデアリマ
 ス
 彈着ニ偏避ガデキダトキ之ヲ修正スニハ
 彈丸着タノト反對ノ處ヲ照準シマス
 目標ノ下線ヲ視フハ何故ナリヤ
 銃ノ動搖ニヨリ銃口デ目標ヲ隠スガアリマス故下際ヲ視ヘハ其
 ノ氣支ハアリマセヌト照準ヲ精確スルタメデアリマス
 問 答
 右手ニテ銃把ヲ堅ク握ルハ何故カ
 發射ノ時食指ノ運動カ右手ニ傳ハリ手カラ肩ニ傳リテ偏避ガ起
 ルノナイ様ニスル爲メデス
 問 答
 右肘ヲ上ケ肩ト齊頭ニスルハ何ノ爲メカ
 肩ヲ上ニ響テ照準線ヲ眼ノ高サニヤル爲メデス

問

左手ヲ銃ノ重点ヲ握ルハ

答

發射裝填ノ爲メノ疲勞ヲ減ラヌ爲メデス

問

両手ヲ以テ始終銃ヲ肩ニ壓着スルハ

答

容易ク反動ニ堪ユ又銃ヲ確カリ持ヌセシカ爲メデス

問

膝射ノ姿勢ニテ左脚ハ真直ニセザルベカラヌ其譯ハ

答

左足カ前ノ方ニ傾クキハ身体モ前ニ曲リ照準ノ姿勢ガ悪クナリマ

ス

左脚カ後方ニ傾ケハ反動ヲ支フルコトガ出來ナイカラ真直ニセナケ

レバナリマセヌ

問

獨立射撃ノ限界トハ

答

二百米以内ニ在テハ各種ノ目標

問

三百米以内ニ在テハ伏姿單獨兵

答

四百米以内ニ在テハ膝姿單獨兵

問

五百米以内ニ在テハ立姿單獨兵二人密接セル二人膝姿兵

六百米以内ニ在テハ密接セル二人立姿兵及單獨騎兵

射撃ノ徽章

問

射撃ノ徽章トハ

答

長射手ニ與フル名譽ノ賞標デアリマス

射撃徽章ノ種類

第一種 特別射手 聯隊ニ三個

第二種 一等射手 各大隊下士二個各中隊兵卒二個

第三種 二等射手 各中隊兵卒ニ二個

第四種 三等射手 各中隊兵卒一個

第十章 距離測量

問

一米突トハ日本ノ何尺ナリヤ

答

三尺三寸デアリマス(一千米突ハ一吉羅米突ト云フ)

問

十碼知トハ(一テシメートル)

答

一米突ノ十分一テヌ即チ日本ノ三寸三分テヌ

距離測量

問 一珊知トハ(十ミリメートル)

答 日本ノ三分三厘デアリマス

問 距離測量ニ幾種アルカ

答 三種アリ其一步測其二目測其三音響測量デアリマス

問 歩測法ハ

答 此處ヨリ向フマテノ間ダチ歩ンダ足ノ數ヲ測カリマスモノデアリ

マ

但シ複歩ヲ用ユルヲ良トス(複歩ハ二足歩ミタルヲ一複歩トシマ

ス)

問 汝ハ百米突テ何複歩ニテフムヤ

答 何十何歩テス

問 目測法ハ

答 物ノ能ク見ユルノト朦朧トスルノト又其大ト小トヲ比ベテ測リマ

ス

問 太陽ニ向ヒテ物ヲ見ルハ

答 距離カ遠ク見エマス之レハ物カハツキリト見エナイカラデアリマ

ス

問 太陽ヲ背ニシテ物ヲ見ルハ

答 距離ガ近カク見エマス之レハ物ガハツキリト見ユルカラデアリマ

ス

問 馬首或ハ歩兵手足ノ運動ヲ認ムルハ幾何距離カ

答 八百米突迄デアリマス

問 音響ニ依テ距離ヲ量ルノハ何テヤルカ

答 口誦節調ト云フモノテ量リマス

問 口誦節調ノ速度ハ

答 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、トノ間ヲ三秒ニ十丈ケテ數ヘマ

ス

問 口誦節調ニ依テ距離ヲ測ルハ

答 口誦節調ニ依テ距離ヲ測ルハ

答

硝煙ヲ見ルト置グニ口誦ヲ始メマシテ音ノ耳ニ届クト口誦ヲ止メ其間ニ數ヘタ節調ノ數ニ依テ之ヲ知リマス例ヘハ五マテ言フタレ

ハ五百米突テアリマス

問

節調數ノ十ヲ越ルルハ

別ニ又一ヨリ始メマス若シ夜間ナレバ銃カラ出ル火光ヲ見テヤリ

マス

第十一章 兵 語 解

問

縦隊トハ

答

兵隊ノ諸隊前後ニ重ナルノヲ申シマス例ヘハ中隊縦隊ヤ側面縦隊

ノ様ナモノゾス

問

先頭トハ

答

隊ノ先頭ヲ云ヒマス

問

後尾トハ

答

隊ノ後尾ヲ云ヒマス

問

横隊トハ

答

兵隊ノ諸部隊重ナラズニ左右ニ並フノヲ申シマス

問

右翼トハ

答

隊ノ右端ヲ申シマス

問

左翼トハ

答

隊ノ左ノ端ヲ申シマス

問

正面トハ

答

兵隊ヲ以テ占領ル真正面ノ幅ヲ申シマス

問

側面トハ

答

兵隊ノ居ル左側又ハ右側面ヲ云フ

問

間隔トハ

答

左右ノ隔タリヲ申シマス例令ハ二兵卒又ハ二ツノ隊ノ側ノ離リノ

問

距離トハ

答

様ナモノデアリマス

答 前後ノ隔リヲ申シマス例ヘハ二部隊ノ間及ヒ二列ノ隔リノ様ナモ
 ノデアリマス
 問 想像的トハ
 答 敵ノ居ル處ヤ兵ノ數ヲ只想像スル者ヲ申シマス
 問 仮設敵トハ
 答 敵兵ヲ擬スルニ寡少ノ兵ヤ旗ヲ以テスルモノヲ云フ
 問 實設敵トハ
 答 兩方トモ同シ兵ノ數デ對抗連動スルモノヲ云フ
 問 第十二章 歩兵工作摘要
 問 歩兵ノ持ツ器具ノ種類ハ
 答 方匙、小十字鋏、小斧、疊鋸、デアリマス
 問 持シ器具ノ外ニ歩兵ノ使フ器具ハ
 答 大隊ニ馱載器具ト云ガアリマス夫レハ馬ニ馱ケテ輸ブ者デス
 問 馱載器具ノ種類ハ

答 大隊ニハ圓匙四八、十字鋏一六、斧八計七二馬二頭ニ馱載シマス
 問 歩兵中隊ニ在ル器具ノ數ハ如何
 答 方匙六十八、小十字鋏十七、小斧八、疊鋸五、計九十八
 問 携帶器具ノ附ケ方ニニツアリ如何
 答 一ツハ背囊ニ附ケ一ツハ帶革ニ附ケマス (但シ帶革ニ着ケルノハ
 一ツハ背囊ニ附ケ一ツハ帶革ニ附ケマス) (敵ニ近イテ作業スル時
 マス)
 問 掩堡トハ如何ナルモノヲ其種類ハ
 答 第一ニ敵ヲ充分ニ射撃シ第二ニ身体ヲ隠ス爲メノモノデアリマシ
 一ツ伏射掩堡、膝射掩堡、立射掩堡ノ三デアリマス
 問 掩堡ハ大砲彈ニ抵抗シ得ルヤ
 答 小銃彈ニ抵抗シ得ルモ大砲彈ニハ抵抗スルヲ能ハス
 問 大砲彈ニ抵抗シ得ルモノアリヤ
 答 強硬掩堡及ヒ急造野堡ノ如キモノデアリマス
 問 馱載器具ヲ使フテ作業スル片工場ノ長サハ

答 四百米突ニテ圓匙三個ト十字鍬一個ノ鉄ノ所ノ長丈テアリマス

問 レヲ四人ニテ掘リマス
携帶器具ヲ使フル一人掘ル幅ハ

答 一米突ニシテ方匙二倍ノ長サテアリマス

問 天然鹿柴トハ

答 木ヲ其場所デ伐リ倒シタ儘障礙物トスル者ヲ云ヒマス

問 人造鹿柴トハ

答 鹿柴ヲ造ル所ヘ木ヲ望ム所ノ位置ニ運ンテ設ケタルモノヲ云ヒマ

問 副防禦ハ何ノ用ヲスルカ

答 道ノ上ヤ壕ノ向ノ岸ニ置キ敵ノ運動行進ヲ邪魔スルモノテアリマ

問 鉄條網トハ

答 杭ヲ鱗次ニ植ヘ縦横ハ斜ノ向ニ鉄ノ針金ヲ緩ク張タモノヲ云マス

問 杭ヲ鱗次ニ植ヘ縦横ハ斜ノ向ニ鉄ノ針金ヲ緩ク張タモノヲ云マス

答 杭ヲ鱗次ニ植ヘ縦横ハ斜ノ向ニ鉄ノ針金ヲ緩ク張タモノヲ云マス



砲臺及内壕ノ面及名

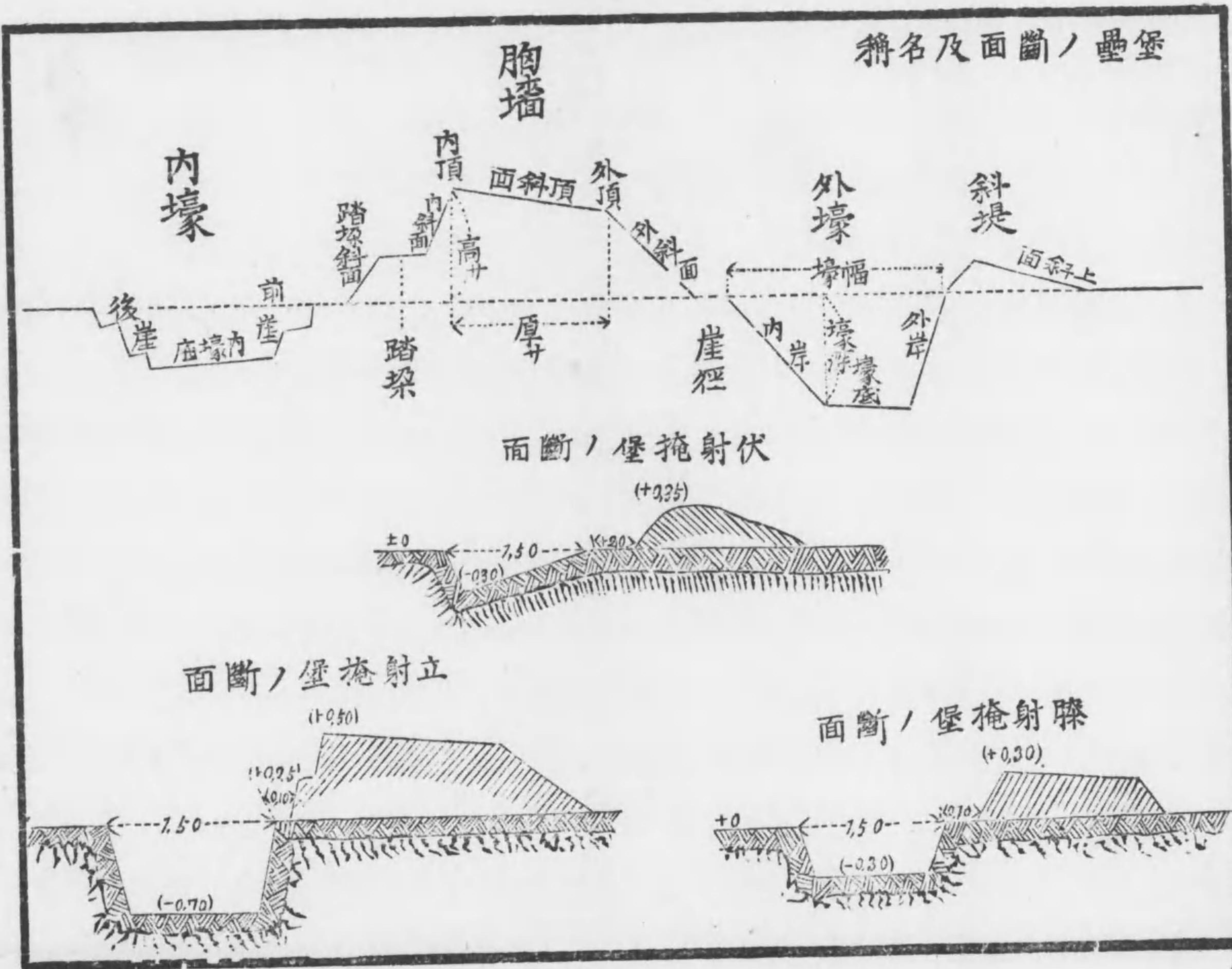
砲臺

内壕

伏射面

面及砲臺ノ面

稱名及面斷ノ壘堡



答 問 答 問 答 問 答

木ヲ堆積所テ伐リ倒シタ儘障物トスル者ヲ云ヒマス
 人造鹿柴トハ
 鹿柴ヲ造ル所ヘ木ヲ望ム所ノ位置ニ運テ設ケタルモノヲ云ヒマ
 ス
 副防禦ハ何ノ用ヲスルカ
 道ノ上ヤ壕ノ向ノ岸ニ置キ敵ノ運動行進ヲ邪魔スルモノヲアリマ
 ス
 鉄條網トハ
 杭ヲ鱗次ニ植ヘ縦横ハ斜ノ向ニ鉄ノ針金ヲ緩ク張タモノヲ云マス

登堡、備面、水、竹、條



問 編條トハ
答 木ノ枝ヤ竹ニテ作リタ平ナル編物ヲ云ヒマス

問 束柴トハ
答 木ノ枝ヲ取リノケタルモノ又竹ヲ續メテ一束トシ四ヶ所ヲ結ビタ

問 保藍トハ
答 ルモノヲ云ヒマス(長サハ二米突五十徑二十珊知米突)

問 小サイ木ノ枝ヤ竹ヲ以テ造リタル底ノナイ籠ヲ云ヒマス
答 編條、束柴、保藍ハ何用チスルカ

問 急ナ所ヤ道ノ修理ヤ又橋ヲ架ケル等ニ用ヒマス
答 第十三章 傳令使ノ心得

命令及報告ヲ傳フル兵ハ○出發前之ヲ複誦シコレヲ傳フルルハ修飾ヲ

ナサス何故ナレバ口上ノ誤ハ全軍ノ敗北ヲ來ス原因トナレハナリ

筆記ノ命令及報告等敵ニ奪ル、恐アルルハ○上衣ノ適宜ノ處ニ縫込或ハ銃腔内ニ入ル、チ可トス

傳令使ノ心得

使者上官ニ遇フハ○敬禮ヲ要シマ
 命令ノ傳ヘ方ハ○必ズ冒頭ニ何官殿何官ノ命令ト云ヒ其命令ヲ陣ヘマ
 ス又單ニ何官ノ命令トモ申スコトモアリマス
 筆記ノ命令報告ヲ持テ行クハ袋ノ印ニ就テハ○袋ノ(十)(十)(十)十
 十)ノ印ニ注意ス其(十)ハ速歩(十十)ハ速歩ト驅歩(十十十)ハ脚
 力ノ及ブ限リ驅歩ニテ行クベキモノナリ
 徒歩傳令使ハ○性敏捷ニシテ脚力強キヲ要ス故ニ之ニ撰レタモノハ
 全力ヲ尽シテ使命ヲ達ナケレハナリマセン
 報告ヲナスニ左右前後此方彼方ノ用ヒ方ハ○常ニ之ヲ用ヒマセン東西
 南北ト云ヒマス
 右側左側右翼左翼ノ語○敵ニ向テ云ヒマス

第四編

第一章 野外要務令摘要

軍ノ主トスル所ハ戰鬥ナリ之ノ目的ヲ達スルニハ○凡百ノ事皆戰鬥
 ナリ以テ基準トナス全軍ノ獨立ハ其軍各分子ノ獨立ニアリ他ヲ補助セ
 ス又補助ニ依頼セス各隊各人皆自ラ其任ノ在ル所ヲ盡シ而シテ後全
 軍ノ一致協同得テ期スヘキナリ
 全軍ノ名譽ヲ宣揚スルニハ○上將校ヨリ下一卒ニ至ル迄常ニ名譽心
 ナリ保有事部下ハ上官ノ名譽ノ爲メ上官ハ部下ノ名譽ノ爲メ互ニ相助
 ケ相成シテ以テ全軍ノ名譽期スヘキナリ
 軍人ノ尤モ禁止スヘキモノニアリ○曰ク爲サマルナリ曰ク遲疑スル
 ナリ
 演習ノ目的及利益ハ○技藝ヲ巧ニシ膽氣ヲ壯ニス
 軍人必須ノ性質ハ○艱苦缺乏ニ耐ヘ且之ヲ克ツニアリ
 師團ノ編成○通常師團司令部步兵二旅團騎兵一聯隊野戰砲兵一聯隊
 工兵一大隊架橋縱列一個彈藥一大隊輜重兵一大隊及野戰衛生部ヲ以
 テ編成ス
 報告ヲナスニハ○報告者自ラ目撃セシコトト他人ノ見聞セシコトト
 他人ニ問フテ得タルコトト又唯推測ニ係カルコトトヲ判然區別スヘ
 シ

傳令騎兵トハ ○命令報告ノ傳達ノ爲メニ附屬セル騎兵ナリ
 徒歩傳令使ニハ ○脚力強健性質敏捷ナル下士卒ヲ要ス
 斥候ノ注意 (一)剛膽ヲ要スト雖モ亦不意ノ危害ヲ豫防スルコトヲ忘ルヘ
 カラス故ニ人民ニ敵意アル地方ニ於テハ大ナル住民地ヲ再ヒ通過セ
 ス又村落ニハ長ク躊躇スヘカラス
 警戒隊トハ前衛側衛後衛等ヲ云フ其任務ハ ○全軍ノ爲メ不意ノ襲撃
 ヲ豫防シ本軍ヲシテ必要ノ命令ヲ下シ且之ヲ實行スルノ時間ヲ得セ
 シムルニアリ
 前衛ノ任務ハ ○本軍ニ展開ノ時間ヲ與ヘ且僅少ノ障碍ヲ除去シ以テ
 本軍ノ行進ヲシテ滯滞ナカラシムルニアリ
 側衛ハ ○時ノ形勢ニ應ジテ前兵或ハ前衛本隊ヨリ分遣シ或ハ直チニ
 本隊ヨリ分遣ス
 前哨本隊ニ在ル兵卒ハ ○通常背囊ヲ卸ロス其他本隊ノ全部若シクハ
 其一部ハ又銃線ノ側ラニアルヘキカハ前哨司令官ノ定ムルモノナ
 リ
 前哨中隊ニハ特別ノ番号ヲ附スルコトナク ○各其中隊固有ノ番號ヲ
 稱スルモノトス

前哨中隊ハ ○背囊ヲ卸ス然レモ其一部ハ常ニ又銃線ノ側ニ在リテ戰
 備ヲ怠ルヘカラス而シテ任務ノ爲メカ又ハ上官ノ許可ナクナクシテ
 其位置ヲ離ル、ヲ許サス
 特別ニ重要ナルカ或ハ其ダ危殆ノ地及查哨ニハ ○必ス下士哨ヲ用フ
 小哨ノ又銃ハ ○步哨ノ交代兵中同時ニ交代スヘキ者及各斥候ニ之ヲ
 爲シ以テ他ノ者ニ拘ラス之ヲ取り得ヘカラム
 小哨ノ兵ハ ○小哨長ノ命令ニ依リ背囊ヲ卸ス然レモ彈藥盒及水筒ハ
 各自身体ニ纏フヘシ任務ノ爲メカ或ハ許可ナクシテ小哨ヲ離ル可カ
 ラス
 步哨特別守則 ○步哨ノ番號隣步哨ノ位置及其番號查哨小哨中隊ノ位
 置此各位置ニ至ル捷徑 前方ニ進メタル部隊ノ位置 監守スヘキ區
 域及敵情 目ニ觸ル、村落等ノ名稱 其他銃ノ携方 隣步哨トノ連
 絡ノ仕方 背囊ヲ卸スヘキカ否等トス
 斥候勤務ニ要スル所ノ性質四アリ ○慧敏熱心沈着剛膽是ナリ蓋シ慧
 敏ナル者ハ未ダ知ラサルノ地ニ於テ能ク其地形方位及道路ヲ知り熱
 心從事スル者ハ久キニ耐ヘ勞ヲ覺ス沈着及剛膽ナル者ハ不意ノ事ニ
 驚カス如何ナル危険ニ際スルモ猶能ク脱逸ノ方法ヲ求得ルモノナリ

獨立下士哨トハ ○小哨ノ小ナルモノニシテ其任務及動作モ亦小哨ト
 同一ノ原則ニ從フモノトス此下士哨ハ歩哨線前ニ出シ主要ナル地点
 チ固守スルコトアリ
 行李ニ大小二種アリ ○大行李トハ宿營間必要ノ物品ニシテ小行李ハ
 戰鬪間必要ノ物品ヲ云フ
 歩兵一大隊ノ小行李ハ ○副馬一頭 衛生材料駄馬一頭 彈藥駄馬十
 八頭 彈藥駄馬一頭ニ二箱ヲ駄載シ其彈數ハ大凡一銃ニ付各自携帶
 ノ彈數ニ同シテアリマス 器具駄馬二頭 豫備駄馬一頭
 歩兵大隊ノ大行李ハ ○荷物駄馬九頭 炊具駄馬十頭 糧秣駄馬十六
 頭 豫備駄馬二頭 豫備蹄鉄駄馬一頭
 彈藥縱列トハ ○歩兵砲兵ノ豫備彈藥ヲ運搬スルモノヲ云フ而シテ彈
 藥縱列一大隊ハ歩兵彈藥縱列ト砲兵彈藥縱列ヨリ成ル
 糧食縱列トハ ○軍隊ノ携口糧食ヲ運搬スルモノニシテ各兵ニ四日分
 宛供用セシメ得ヘシ
 架橋縱列トハ ○工兵隊ノ運搬スル架橋材料ニシテ其中二米突五十長
 百四十米突ノ架橋ヲナシ得各兵種其通行ニ差支ナシ
 人馬ノ給養法ニ四種アリ ○宿舍給養 倉庫給養 携行糧秣給養 徵

發給給養是ナリ
 戰時出戰軍ニ屬スル兵卒一日ノ食量ハ ○精米六合食鹽或ハ梅干及魚
 菜若干トス
 軍隊ノ携行糧食ハ ○携帶口糧ニ日分 大行李一日分 縱列四日分合
 セテ七日分トス
 携帶口糧トハ ○軍隊屯營ヲ出發スル時ヨリ各人豫備糧食トシテ携帶
 スヘキ者ニシテ其糧ニ日分糲三合食鹽若干トス又時トシテ之ニ代フ
 レニ乾麵包或ハ精米ヲ用ユルコトアリ此口糧ハ非常ノ場合ト全ク他ニ
 給養法ナキ時ノミニ非ザレバ之ヲ用フル能ハス若シ此禁ヲ犯ス者ハ
 嚴罰ニ處ヒラル
 各隊ニ衛生勤務ノ人員即チ ○軍醫看護長看護手ヲ備フ其他中隊ニ補
 助擔架卒アリ
 補助擔架卒トハ ○戰鬪ヲ開クマテ中隊ノ列中ニアリ假綱帶所ヲ設ク
 レ命令ニ依リ勤務ニ從事スルモノトス
 綱帶所ノ標示ハ ○赤十字ノ標旗ヲ植テ(外征ニ在テハ國旗ト共ニ)夜
 間ハ更ニ赤色ノ燈ヲ掲ク
 赤十字社トハ ○文明諸國會盟シ戰地ニ於テ患者ヲ救護スルノ方法ヲ

定メ彼我ノ別ナク殘酷ノ取扱ヲナサ、ルノミナラズ傷病者ヲ救助ス
ル人員及器具ニ對シテハ互ニ保護ノ義務ヲ盡ス、コトヲ盟約シタル結社
ヲ云フ

赤十字社ノ標章ハ ○白地ニ赤十字ヲ識セルモノナリ

赤十字社條約解釋

往昔ハ戰爭トイヘハ敵ヲ殲シ財産ヲ掠メテ尙ホ飽クコト無カリシカ人
智開ケ法律整ニ隨テ戰爭ノ主義モ亦共ニ改マリ敵ト雖モ我ニ抗敵ノ心
ヲ滅シ其力ヲ失ヘハ即チ之ヲ敵視スル事ナシ故ニ彼我對戰スルモ彼ニ
於テ兵器ヲ棄テ又ハ抗敵ノ状態ヲ止ムル時ハ即チ之ヲ敵ト看倣サ、ル
ヲ法トス是ニ於テ文明諸國盟約シ戰地ニテ互ニ患者（負傷者並ニ病者
ヲ總稱ス）ヲ救助スル方法ヲ定メ其同盟ノ國々ハ相互ノ間不幸ニシテ
戰爭ヲ開キ軍人傷ヲ受ケ敵地ニ在ル事アルモ殘酷ノ扱ヲ受ケス却テ其
尊敬救護ヲ受ルニ至レリ我
皇帝陛下ハ我軍人軍屬ヲシテ此幸福ヲ享ケシメントノ 聖慮ヨリ遂ニ
昨年六月五日ヲ以テ此條約ニ同盟アラセラルレ我政府ハ昨年十一月十五
日ヲ以テ全國ニ其勅令ヲ公布シタリ實ニ我軍人軍屬ノ一大幸福ニシテ

我國ノ品位ヲ進メタルコトモ亦大ナリト謂フヘシ（軍律整ハス文明ノ
程度低ク殺伐屠戮ノミヲ以テ軍人ノ本色トスル未開國ノ如キハ此赤十
字ノ盟約ニ入ル事ヲ許サレズ）然レハ敵ニ於テ我患者ヲ扱フコト此ノ
如クナレバ我モ亦其心得ナカルヘカラス若シ此心得ナク萬一此條約ニ
反ケル行爲アル時ハ畏クモ
皇帝陛下ノ至仁至慈ナル 聖慮ニ乖キ國ノ品位ヲ墜スノミナラス自己
ノ身ニ自ラ刀ヲ加フルニ齊シキ道理ナレハ深ク慎ザル可ラズ扱其心得
トテハ前ニ述タルユトチ心ニ酌シ即チ相戰フモ敵己ニ抗戰スル力ナキ
時ハ決シテ之ヲ敵ト視ルベカラズ例令ハ戰酣ニシテ互ニ接戰奮闘スル
中敵我爲ニ傷ケラレ兵器ヲ棄テ退カバ復ヒ之ニ兵器ヲ向ケス又ハ我兵
敵陣ヲ破リ其敗走スル者ヲ追撃スル時敵若シ患者ヲ遣シテ退カバ其患
者ニハ銃劍ハ勿論侮辱ヲモ加ヘズ且ツ之ニ向テ互ニ軍人タルノ禮義ヲ
正シクシ尊敬ノ意ヲ表スヘシ又醫官看護長卒及ヒ擔架卒ハ此等ノ患者
ヲ見ハ速ニ之ヲ救助運搬シ彼我ノ別チ無ルヘシ此心掛ハ唯ニ交戰中ノ
ミニ非ズ進軍又ハ退軍ノ時ニテモ總テ赤十字ノ橫章アルモノニハ特ニ
此尊敬保護ノ意ヲ忘ルベカラズ故ニ凱旋ノ際ナト渡船場停車場等ニ於
テ夥多ノ軍人集ル時先ツ患者ヲシテ第一ニ其場所ヲ通過セシムル等皆

此意ニ基ク者ナリ
 此條約ニ同盟シタル國ハ患者ヲ救護スル爲ニ設クモ人員家屋器具ニハ赤十字ノ標章ヲ附シ此赤十字ノ標章アルモノハ總テ局外中立ノ待遇ヲ受クルモノトス局外中立トハ敵ニモアラズ身方ニモアラズ全ク彼我ニ關係ナキ者ヲ謂フナリ
 此赤十字ノ標章ノ原由ハ最初此條約ヲ締結セシ場所瑞西國ヂエチーヴ府ナリシヲ以テ其國ノ旗章ニ象ドリ(瑞西國ノ旗章ハ赤地ニ白ノ十字ナリ故ニ其裏ヲ取リテ白地ニ赤ノ十字ヲ畫ク)遂ニ此社及ヒ此條約ニ名ツクルニ皆赤十字ヲ以テスルニ至レリ
 此赤十字條約ハ西歷千八百六十四年即チ我が元治元甲子ノ年八月ニ瑞西國ヂエチーヴ府ニ於テ瑞西等十二ヶ國ノ會議ニテ成立シ赤十字社ヲ同府ニ置キ他ノ同盟各國ニ各支社ヲ設ケタリ
 戰時人員並ニ物件ニ附スベキ此赤十字ノ標章ハ一定ノ軍廠ニ於テ開戦ノ前ニ渡スモノトス縦ヒ軍人ノ負傷救護ニ從事スル者ナリトモ各自勝手ニ之ヲ附スルコトヲ嚴禁ス若シ恣ニ此赤十字ヲ附スル時ハ此貴重ナル標章ヲシテ却テ無効ノモノダラシムルニ至ルカ故ナリ深ク注意スベキコトアガレ今此條約ノ趣意ヲ明瞭ナラシメン爲メ左ニ我

皇帝陛下ノ此條約ニ加盟シタマヒタル約定書ヲ掲ケ其各條ノ末ニ小解ヲ加ヘタル雙方ヲ參照シテ有難キ 聖意ノ程ヲ感戴スベシ
 夫レ己ニ我 皇帝陛下ノ加盟アラセテレバ即チ我全國ノ人民皆之ニ加盟セシモノナリ然レハ一人モ此盟ニ背クヲ得ズ殊ニ軍人タルモノハ此ノ規約ヲ一層嚴密ニ守ルベキ責任アルモノナリ

明治二十年三月

勅令寫

朕西歷千八百六十四年戰時負傷者ノ不幸ヲ救済スル爲メ瑞西國外十一國ノ間ニ締結セル赤十字條約ニ加入シ茲ニ之ヲ公布セシム

御名 御 爾

明治十九年十月二十五日

内閣總理大臣	伯爵	伊藤	博文
外務大臣	伯爵	井上	馨
陸軍大臣	伯爵	大山	巖
海軍大臣	伯爵	大山	巖

西曆千八百六十四年八月二十二日瑞西チエチーヴ府ニ於テ

瑞西國外十一國ノ間ニ締結セル赤十字條約同盟書

日本皇帝陛下ハ軍隊出陣負傷者ノ状態改良ノ件ニ關シ千八百六十四年八月二十二日チエチーヴニ於テ瑞西聯邦バート大公陛下、白耳義皇帝陛下、丁抹皇帝陛下、西班牙皇帝陛下、佛蘭西皇帝陛下、ヘッス大公殿下、伊太利皇帝陛下、和蘭皇帝陛下、葡萄牙及アルカルプ皇帝陛下、普魯士皇帝陛下、ヴェルダンベール皇帝陛下ノ間ニ締結セル左ノ條約ヲ認識ス

第一條 戰時假病院及ヒ陸軍病院ハ局外中立ト見做シ患者若クハ負傷者ノ該病院ニ在院ノ間ハ交戦者之ヲ保護シテ侵スコト勿ルベシ但戰地假病院及ヒ陸軍病院ハ兵力ヲ以テ之ヲ守ル時ハ其局外中立タルノ資格ヲ失フモノトス

○戰時ニ設ケタル繙帶所并ニ病院ヲハ局外中立トシ此所ニ於テ患者ヲ治療スル間ハ假令彼我ノ分チアルモ其繙帶所及ヒ病院等ニ向テ打入發砲スル事ヲ禁スルハ勿論更ニ親切ヲ盡シ保護尊敬スベキモノトス但シ其繙帶所及ヒ病院ニ外襲ヲ衛ルガ爲ニ兵隊ヲ置ケハ忽チ局外中立ノ資格ヲ失フモノトス是レ言ヲ防衛ニ托シテ攻守ノ用ニ供スル

兵ヲコ、ニ雷カンコトヲ慮リテ豫メ之ヲ防ケルナリ但シ其患者取締ノ爲ニ些少ノ風紀衛兵ヲ置クハ妨ナシ

第二條 戰地假病院及ヒ陸軍病院ニ於テ任用スル人員即チ監督員、醫員、事務員、負傷者運搬員、并ニ說教者ハ各其本務ニ従事シ且ツ負傷者ノ入院スヘク若クハ救助スヘキ者アル間ハ局外中立ノ利益ヲ享有スルモノトス

○繙帶所及ヒ病院ニ於ル醫官、藥劑官、監督員、事務掛、看護人、患者運搬人及ヒ說教者救護私社員（我國ノ博愛社ノ如キ是ナリ）等ハ患者ニ就テ各自其職務ヲ盡ス間ハ局外中立ノ資格ヲ受ルモノナリ例之ハ己ニ繙帶所又ハ病院等敵ノ占領地トナリタル時モ右ノ人々患者救護ニ従事シ居ル間ハ敵ニ擒トセラレ、コトナク敵モ之ヲ擒トスルコトヲ得サルナリ故ニ此際ニ於テハ敵地ニアルモ少シモ懸念ナク十分患者ノ保護ニ心ヲ盡スベク又敵軍モ之ヲ護衛シテ患者ノ保護ニ力ヲ盡サレムルモノナリ

第三條 前條ニ掲ゲタル各員ノ従事スル戰時假病院若クハ陸軍病院ハ敵軍ノ占領ニ係ルト雖モ各員ハ依然其本務ヲ行フコトヲ得ベク若クハ其屬スル隊ニ再ヒ加ヘル爲メ退去スルコトヲ得ベシ

前項ノ場合ニ於テ各員其職ヲ罷ル時ハ占領軍隊ヨリ敵軍ノ前哨ニ之ヲ送致スベシ

○第二條ニ示シタル人員ハ其居ル綑帶所又ハ病院ガ敵軍ニ圍マレタ
ル時ト雖モ其儘安心シテ職務ヲ執ルコトヲ得ベシ又夫々患者ノ處置
ヲ畢リテ味方ノ軍ニ歸ラントスル時ハ其趣ヲ先ヅ敵軍ニ申出セハ其
護送ヲ受ケテ味方ノ前哨ニマデ歸ルナリ

第四條 陸軍病院ノ器具什物等ハ交戰條規ニ從テ處置スベキモノナリ
故ニ該病院附屬ノ各員ハ其退去ノ際各自ノ私有品ヲ除クノ外爾餘ノ物
品ヲ携帶スルコトヲ得ズ

但戰地假病院ハ前項ノ場合ニ於テモ其器具什物等ヲ保有スルヲ得
○此條ハ病院ト綑帶所トノ區別ヲ明ニセシモノナリ凡ソ病院若シ敵
軍ニ圍マレ又ハ敵ノ占領地トナル時ハ其病院并ニ治療器械、藥劑、
傷者運搬具等ハ占領軍ノ法ニ據リテ處置セラレ其病院附ノ人々ハ身
方ノ軍ニ歸ルヲ得ルモ其際只各自ノ私有品ノミヲ持チ販ルメク決シ
テ前ニ述ベタル諸器械ヲ持チ歸ル事ヲ得ザルナリ然ルニ戰地假病院
(戰地假病院トハ綑帶所ヲ謂フナリ)ハ病院ト同クカラズ假令敵ニ圍
マレ又ハ敵ノ占領地トナル時ト雖モ悉皆元ノ資格ヲ有スル故ニ其人

ト物ト共ニ進退シテ妨ナシ

第五條 負傷者ヲ救助スル土地ノ住民ハ侵ヌコトヲ得ズ且ツ之ヲシテ
其自由ヲ得セシメザルベカラズ

交戰國ノ將官ハ住民ニ慈善ノ舉ヲ從憑シ且ツ慈善ノ舉ニ依テ局外中立
タルノ資格ヲ有スルコトヲ得ベキ旨ヲ豫告スルノ責アルモノトス
家屋内ニ負傷者ノ接受シ之ヲ看護スル時ハ其家屋ヲ侵ヌコトヲ得ズ又
自己ノ家屋ニ負傷者ヲ接受スル者ハ戰時課税ノ一部ヲ免カレ且ツ其家
屋ヲ軍隊ノ宿舍ニ供用スルコトヲ免カレヘシ

○總テ患者ヲ救助看護セル其土地ノ人民ヲハ特ニ之ヲ轄ヒ彼等ガ戰
地ヨリ傷者ヲ運レ歸リ又ハ看護セントスル時ハ其事ヲナスコト十分ノ
自由ヲ得セシムベシ

司令官ハ開戰ノ前ヨリ其交戰地方ノ人民ニ對シ患者救護ノ最モ慈善
ナル事及之ヲ行フモノヲハ局外中立ニ認ムベキ事等ヲ其交戰地方ノ
人民ニ廣告シ患者救護ノ舉ヲ勸奨シ其懇情ヲ褒賞スル等ノ任務アル
者トス戰地ノ人民若シ負傷者ヲ我家ニ引受ケ看護スル時ハ其家ハ敵
ヨリ侵サレ、一ナク又身方ヨリ戰時ノ稅ヲ課セラル、一無ク其家ヲ
軍隊宿泊ノ用ニ充ラル、事ヲ免、等種々利益アル者ナリコレ即チ局

外中立ノ利益ナレハ戰地司令官タルノ人ノ豫メ能ク其地方人民ニ示
スヘキ事項ナリ

第六條 負傷シ又ハ疾病ニ罹リタル軍人ハ何國ノ屬籍タルヲ論セス之
ヲ接受シ看護スヘシ司令長官ハ戰闘中ニ負傷シタル兵士ヲ速ニ敵軍ノ
前哨ニ送致スルコトヲ得但右ハ其時ノ形勢ニ於テ之ヲ送致スルコトヲ
得ベク且尙軍ノ協議ヲ經タル場合ニ限ルモノトス

治療後兵役ニ堪ヘズト認メタル者ハ其本國ニ送還スベシ

又其他ノ者ト雖モ戰爭中再ヒ兵器ヲ帶ビサル旨盟約ニシテ者ハ其本國
ニ送還スヘシ

患者負傷者退去スル時ハ其之ヲ率フル人員ト共ニ完全ナル局外中立ノ
取扱ヲ受シヘシ

○軍人ニテ傷ヲ受ケ或ハ病ニ罹リタル者ハ敵味方ノ差別ナク其屬籍
ノ何ノ國ナルニモ拘ハラズ皆之ヲ助ケ救護スベシ

司令官ハ戰爭中敵ノ患者ノ運搬シ遣サレタル者アレバ速ニ之ヲ敵ノ
前哨ニ送り遣ヒテ妨ナシ但シ此事ハ其時ノ都合ニ依ルヘシ又彼我尙

軍此事ニツキ豫テ協議濟ノ場合ニ限ルヘシ
敵ノ患者ヲ我軍ニテ治療シタル時此後兵役ニ堪スト認定セシ者ハ其

本國ニ送還スヘシ又兵役ニハ堪ユヘキ者タリトモ其戰爭中再ヒ兵器
ヲ執ラスト誓約スル者ハ之ヲ還スモ妨ナシ

本國ニ還ル患者ニ附副タル護送人ハ患者ト共ニ十分ナル局外中立ノ
資格アルモノトス

第七條 陸軍病院戰地病院並ニ患者負傷者退去ノ標章トシテ特定一様
ノ旗章ヲ用ヒ且ツ其傍ニ必ス國旗ヲ掲グベシ

局外中立タル人員ノ爲ニ臂章ヲ裝附スルコトヲ許ス但其交附方ハ陸軍
官衙ニ於テ司ルヘシ

旗及ヒ臂章ハ白地ニ赤十字形ヲ畫ケルモノタルヘシ

○病院綑帶所並ニ患者ノ立チ退ク時ハ之ヲ明カニ示サン爲メ必ス白
地ニ赤十字ヲ畫シタル旗ヲ立テ尙ホ其國旗ヲモ掲シヘキモノトス

局外中立ノ資格ヲ得テ其取扱ヲ受ヘキ人員即チ病院醫官、藥劑官、
監督員、事務掛、看護人、傷者運搬人、說教者及ヒ救傷會社員ニハ

陸軍省ヨリ特別ニ免許シテ白布ニ赤十字ヲ畫キタル徽章ヲ其臂ニ着
セコトヲ得セシムヘシ

第八條 此條約ノ實施ニ關スル細目ハ交戰軍ノ司令長官ニ於テ其本國
政府ノ訓令ニ從ヒ且ツ此條約ニ明示シタル綱領ニ準據シテ之ヲ規定ス

○此十ヶ條ノ條約ヲ實地ニ行フ手續キノ細キ規則ハ戰時ニ臨ミ司令官ニ於テ其政府ノ訓令ニ從ヒ且此條約ノ綱領ニ就テ定ムヘキ者トス

第九條 此締盟各國ハチユチーヴ會議ニ全權委員ヲ派遣セザリシ政府ニ此條約ヲ示シ其加盟ヲ請フ事ヲ約諾セリ因テ之カ爲議事録中餘白ヲ存ス

○西曆千八百六十四年即我元治元甲子ノ年此條約ニ締盟シタル十二ヶ國ノ全權委員ハ其時此會議ニ加ハラザル國々ニ此條約ヲ見セテ加入ヲ勸ムル事ヲ約束セリ故ニ此時其議事録ノ中ニ紙面ヲ餘シ置キ他日後ヨリ加入シタル國々ヲ書加ヘル爲ノ準備ト爲セリ

第十條 此條約ハ批准ヲ受クヘキモノトス而シテ其批准書ハ「ベルヌ」ニ於テ四月以内若クハ可成其以前ニ交換スヘシ

○此第十條ニ述ヘタル言ハ總テ各國交換ノ條約書ニ用フル例文ニテ此赤十字條約ノミニ限レルニハ非サレトモ因ミニ解チ加ヘ置クヘシ

○此條約ハ各國ノ全權委員ニ於テ各其本國帝王ノ批准ヲ受ケテ行フヘキモノニシテ其批准ヲ受ケタル條約書ハ又ベルヌ（瑞西國ノ都府ナリ）ニ於テ成ルヘク早ク受取渡シテ爲ヘシ遲クトモ最初ヨリ四ヶ

月ヲ過グ可カラズ此四ヶ月トハ各其本國ニ照會住復ノ猶豫ノ日數ヲ取リタルモノナリ

是ニ於テ下名瑞西聯邦駐節日本皇帝陛下ノ特命全權公使本件ニ關シ特別ノ權限ヲ帶ビ此書ヲ以テ日本帝國ノ本條約ニ加盟スルコトヲ告知ス

○右ニ付キ我 皇帝陛下ヨリ特別ノ命ヲ受ケテ瑞西聯邦ニ駐節シ居ル全權公使ハ 皇帝陛下ノ命ニ依リ此事ニ付特別ノ權限ヲモチ此書附テ以テ我國ノ此條約ニ加盟シタルコトヲ知ラシム

右確證ノ爲メ下名ハ千八百八十六年六月五日「ベルヌ」府ニ於テ此告知書ニ記名調印スルモノナリ

○右證據ノ爲左ニ記シタル姓名ノ人西曆千八百八十六年即我明治十九年六月五日瑞西國ベルヌ府ニ於テ此告知書ニ記名シ印ヲ押シタリ

瑞西國聯邦駐節日本特命全權公使候爵

蜂 須 賀 茂 韶 手 署

彈藥ヲ火線ニ補充スルニハ ○需要ニ從ヒ成ルヘク援隊若クハ豫備隊ノ兵ヲ使用ス此兵ハ命令ニ從テ彈藥馱馬所在ノ地ニ赴キ下士ヨリ彈藥ヲ受領シテ指示セラレタル中隊ニ搬送スヘシ一箱ノ彈藥ハ結束ノ

マ、之ヲ箱ヨリ出シ兵卒二人ニ分チ搬送スルモノトス
 援隊火線ニ増加スルハ各兵卒ハ ○勉メテ己ニ火線ニ在テ射撃スル兵
 ノ爲メ補充彈藥ヲ携ヘ行クベシ
 又傷傷者及死者ノ彈藥ヲ收拾スルヲ緊要トス
 瀛車ノ客車一輛ニハ下士兵卒四十名或ハ將校廿四名ヲ載スベキ者トス
 秋季演習ノ要点ハ ○各兵種互ニ協力一致シ以テ一目的ニ對シ各自固
 有ノ力ヲ適當ニ使用スルヲ 動作上指揮官ト兵卒トニ論ナク凡テ適
 當ニ地形ヲ利用シ且諸種ノ困難ニ打勝ツ等ナリ
 機動演習ニ五種アリ ○旅團演習 師團演習 仮設敵ニ對スル師團演
 習(以上小機動演習ト云フ)師團對抗演習 特別抗演習 (以上大機
 動演習ト云フ)
 平時演習中危害ノ豫防ニ關スル注意ハ ○如何ナル場合ニテモ敵ニ對
 スル一百米突以内ニシテ發射セヌ又突撃ノキモ互ニ五十米突ヨリ近
 接セヌ
 演習中「氣ヲ付止レ」ノ号音アルルハ ○直ニ其地ニ停止シ決シテ射撃
 スルヲナシ

人馬物件重量表

軍裝	シタル步兵	八一	キログラム
兵器及裝具	ナキ步兵	六一	
馬	(鞍 共)	三六〇	
騎兵		四三六	
七珊米山砲(附属人馬共)		一、一八三	
全 馱馬(最重ノモノ)		七四五	
七珊米野砲(附属人馬共)		三、八九〇	
全 彈藥車(右ニ全ク)		四、〇五五	
全豫備品車(右ニ全ク)		三、七九一	

輻重駄馬(荷物輸卒共)

五四八

日佛度量衡比較表

ミリメートル	我三厘三毛三三三強
センチメートル	我三分三厘三毛三三強
メートル	我三尺三寸三分三厘強
グラム	我二分六厘六毛六六強
キログラム	我二百六十六匁六分六厘六強
全長	三十年式步兵銃
銃劍共	一、六六五
銃劍除ク	一、二七五
銃劍共	四、二九五
重量	三、八五〇

初速	六百七十八米
裝藥	二瓦七
彈丸ノ重量	十瓦五〇
彈藥筒全量	二十二瓦
彈丸ノ中徑	六密米六五

掩堡ノ種別	胸牆ノ厚	内頂ノ高	崖徑	濠深	濠上幅
立射掩堡	一〇〇	〇五〇	〇、一〇	〇、七〇	一、五〇
膝射掩堡	一〇〇	〇、三〇	〇、一〇	〇、三〇	一、五〇
伏射掩堡		〇、三五	〇、二〇	〇、三〇	一、五〇
掩堡ノ記臆數					

各兵種水上通過シ得ル水深	○、九 ^{以上}	步兵	○、八 ^{以下}	步兵、野砲兵、輜重兵、馱馬
○、一二	騎兵	一、〇〇	騎兵、山砲、馱馬	
○、一六	野砲兵及其他車輛			
距離實測誤差ノ關及				
近ク實測スル場合		遠ク實測スル場合		
一、太陽ヲ背ニスル片		一、太陽ニ面スル片		
二、上ヨリ下ヲ見ル片		二、下ヨリ上ヲ見ル片		
三、中間ニ斷絶地アル片		三、細長キ場所		
四、目標ノ后方明白ナル片		四、曇天ノ目測		

野戰工事必要人員器具時間表

五、晴天蔽開地ニ於テ目測スル片	六、大平原ノ目測	五、霧アルカ又ハ暗キ所ノ目測	六、目標ノ背後暗黒ナル片
工事ノ種類	作業手ノ員數	器	具
東 柴	三五名	小鎚一 鉋一 約	繩一 手鋸一 約
東 竹	三五名	全	棍二 鐵線鈇
堡 籃	柴竹二名	鉋一 小鎚一 錐	一 鐵線鈇
編 條	二名	全上ノ外 手鋸	一 手加フ
掩 堡	三名 (一ノ工)	圓匙	十字鋏
		一	二
		伏十乃 膝廿乃 立廿乃	步兵攜帶器具ヲ用ユルハ約二倍ノ時間ヲ要ス
		二	五
		四	十
		一	時
		柴ヲ準備スル爲更ニ	工場毎ニ一名ヲ加フ
		鐵線鈇ハ繫帶ニ鐵線	ヲ用ユル片ノミ使用
		二	十五
		八	分
		十	分
		五	分
		二	十五
		分	時

野 壕 厚四米 幅八米 高八〇	六名 (二班)	圓匙 十字鋏	四 二	五時乃至 六時	速成構築法ニ依ル
糾草削截 個百	三名	圓匙 或十字鋏 平鋤 二米尺	四 一	四十分乃至 一小時	
天然 鹿柴 林縁 長サ二 十米ノ 四列	十名	斧二 鋸節鋸 二鋤 四 十米繩 木楔 繩 若干	五 時		四名ハ樹木ヲ伐リ四名 ハ繩ヲ用ヒテ之ヲ倒シ 二名ハ枝葉ヲ伐除ス
人造 鹿柴 長四名 ノ二列	四名	大鋸 一鉄線 鋸或ハ鈎	一 時		樹木ハ鹿柴配置ノ場所 ニ運搬シアルモノトス 抗ハ既ニ植立シアルモ ノトフ
樹枝 ノ長イ米 ノ二列	四名	全 上	全 八		
鹿柴 ノ長イ米 ノ二列	四名	鉄線鋏 一鉄鎚 二釘 若干	一 時 卅分		
鐵條 中五米 深ト米	四名				

第二章 步兵操典摘要

問 戰爭ニ緊要無二ノ要求ハ

答 全力ヲ盡シテ嚴正ナル軍紀及秩序ヲ維持スルニ在リマス

問 散兵ノ動作ハ

答 地形ヲ利用シテ行進停止及射撃シマス

問 行進スル時ハ如何ナル姿勢ヲ保ツヤ

答 銃ニ裝填シテ之ヲ提ケ銃口凡ソ三十度ノ角ヲ爲シ歩度ヲ伸ハシテ自由ナル姿勢ヲ以テ運動シマス

問 停止セシキハ

答 銃ノ最大効力ヲ顯ハシ得可キ位置ヲ撰ミ成ル可ク身ヲ掩蔽スル地物ヲ占領シマス且概テ伏臥ヲシマス

問 散兵ハ地物ヲ利用スルノミテ以テ目的トスルカ

答 否戰鬪ノ真ノ目的ハ敵ト衝突シ以テ最大ノ損害ヲ被ラシメ假令我損害ハ多クトモ諸種ノ抵抗物ヲ排除シテ其志望ヲ達成スルニ在ルノデス故ニ多クノ場合ニ於テハ捷路ヲ取ルノガ最モ利益デアリマ

問 散兵ハ射撃ニ就テ如何ナル事ニ意ヲ用ユルヤ

答 示サレタル照尺ヲ取リ正シク照準シ靜肅ニシテ確實ニ射撃シマス

問 成蹟ナキ射撃ハ如何ナル害アルヤ

答 我軍隊ノ志氣ヲ挫折シ敵ノ銳氣ヲ倍徙セシムルモノデアリマス

問 散兵線ノ射撃ハ幾種アルヤ

答 餘カニ並或ハ急ニ又一齊射撃デアリマス

問 徐カニ打カ、レノ時ハ如何

答 隣兵ト互ニ最モ緩徐ナル射撃ヲ行ヒマス(二乃至三發)

問 並ニ打カ、レノ時ハ

答 隣兵ニ顧慮スルヲナク隨意ニ射撃ヲ行ヒマス(四乃至六發)

問 急キ打カ、レノ時ハ

答 成シ得ル丈ケ早ク彈藥ヲ込メ能ク狙フテ速ニ射撃シマス(八乃至十二發)

問 連続打カ、レノ時ハ

答 彈倉ヲ開キ成シ得ル丈ケノ速度ヲ以テ連續射撃ヲシマス

問 一齊射撃トハ

答 分隊或ハ小隊中隊長ノ号令ニテ一齊ニナス射撃デアリマス

問 射撃ノ軍紀トハ如何

答 火線中各兵卒命令ヲ確實ニ實行シテ銃ノ取扱ヲ嚴守シ又戰鬥ノ法則ヲ遵奉スルヲ云ヒマス

問 之ヲ分解セハ如何

答 一 敵火ノ下ニ在テ之ニ應射セサル時ト雖モ自若トノ停止スルヲ

二 射撃ノ方法ニ注意シ地形ヲ利用シテ命中効力ヲ増大スルヲ計

問 三

答 目標消滅スルカ或ハ指揮官ノ小笛ヲ聞クカ又其他ノ方法ヲ以テ射撃停止ノ命アル時速カニ射撃ヲ止ムルヲ

問 四

答 線上ニ於テ指揮官ノ指揮ナクモ各兵卒ハ勇敢ト果斷トニ由^(果斷ハ射撃スヘキ機)依然射撃効力アラシムルヲ^(或ハセサル機會)

問 戰鬥ノ勝利ハ何ニ歸スルカ

答 好機ノ到ルヲ待ツ爲メ彈藥ヲ節用シ時機來レバ猛烈ノ威力ヲ逞フシテ敵ノ志氣ヲ沮喪セシメ其体力及ヒ彈藥ヲ竭盡セシムルニ巧ミナルモノガ勝チマス若シ之ニ反スル時ハ彼我其勢ヲ異ニシ敵ハ意ノ如ク我ヲ破リマス

問 援隊ノ任務ハ如何

答 戰鬥正面ヲ擴張シ火線ヲ援助シ又敵襲ノ虞アル側面ヲ掩護シマス

問 最初ノ散開ニ於テ援隊ハ約子第一線ヨリ幾何ノ處ニアルヤ

答 百二十米突デアリマス

問 密集隊ハ敵ノ有効射撃下ニ在ハテ其步度ハ如何

答 必ス步調ヲ取リマス退却ニ當テハ特更ニ嚴肅ニ步調ヲ取リマス決シテ不整肅ナレ連動ハ嚴禁デアリマス

問 散兵ハ障碍ニ逢フキハ如何ス可キヤ
 答 決シテ逡巡ス可カラズ歩兵ハ苟モ人ノ跋渉ヲ得可キ地ニ於テハ如何ナル處ト雖モ戰鬪スルコトガデキマス

問 散開戰鬪ニ在テハ密集隊次ニ在ルトキニ比シテ其任務重要ナリト云フ如何
 答 何等ノ場合ヲ論ゼズ己レノ全力ヲ盡スニ由テ好結果ヲ得マス即チ果斷勇敢自信ニ富ミ武器ノ使用及地形ノ利用ヲ巧ミニシテ獨斷事ヲ處理セザリバナリマセヌ

問 歩兵ハ何ヲ以テ戰フヤ
 答 火力ヲ以テ決戰シマス

問 戰鬪中第一危險ナルモノハ何カ
 答 敵ニ背ヲ示ス(敗北)ヨリ危險ナモノハアリマセン即退却ハ自滅ニ陥ルコト同シトデス

問 散兵ハ示サレタル間隔ハ之ヲ墨守スルカ
 答 之ヲ墨守スルモ價值ナシ散兵ハ充分地形ヲ利用スルヲ以テ一時密接シ或ハ離隔スルノ動作ヲ爲スコトガ必要デアリマス又致々トシテ整頓ニ注意スルハ間隔ヲ維持スルヨリモ一層イケマセン散兵線中

問 運動及ビ射撃ヲ防害セザルルヲ以テ充分トシマス
 答 連發射撃ヲ應用スル時機如何

問 一 攻撃ニ於テハ突撃前最後ノ準備ヲ爲スル
 二 防禦ニ於テハ敵ノ突撃ヲ破壞スルル
 三 騎兵ヲ防禦シ或ハ戰鬪間俄然敵ト衝突セシル
 四 退却スル敵ニ向テ追撃射撃ヲ行フル
 五 連發射撃ハ通常三百米突ノ照尺ヲ用ユルモノトス例外ニ千米突以内ノ距離ニ於テ小時間特別ニ利益アル目標現出シ偉大ナル射撃ノ効力ヲ顯ハシ得可キ場合ニ限り用ユルコトヲ得

問 射撃目標ヲ撰定スルノ方法如何
 答 射撃界内ニ在ル敵ノ歩兵ヲ(多クノ場合ニ在テ)以テ主眼トス然レモ砲兵隊ヲ射撃スルコトモ亦之ヲ忽カセニスベカラズ概シテ我ニ多クノ損害ヲ與ヘ且偉大ナル目標ヲ撰定シマス

問 彈藥ヲ節用セサル可カラザル理由ハ
 答 火線ノ初メヨリ常ニ我攜帶スル彈數ニ限アリ故ニ若干ノ彈藥ヲ射耗セバ即チ我カ若干力ヲ減衰スルモノナリ故ニ價值アル場合ノミ發射シマス愈一目標ヲ射撃スヘキヲ決セハ充分其目的ヲ達スルニ

必要ナル彈藥ヲ使用セシカ爲メデアリマス

步兵ノ歩兵ニ對スル戰鬪勝利ハ如何

射撃及ヒ射撃軍紀並ニ射撃指揮ノ宜シキニ基クモノマス

騎兵ニ對スル戰鬪法如何

一步兵射撃ヲ準備シタルキハ一騎兵ニ優ルモノマス假令多數ノ騎

兵ト雖モ自若トシテ堅確ナル姿勢ヲ保チ沈着熟慮シ適當ニ火器ヲ

使用セバ決シテ畏ル、ニ足リマセン

砲兵トノ戰鬪法如何

遠大ノ距離ニ在リテハ砲兵ノ火力歩兵ニ優ルモノマス一千米突ノ

距離ニ至リ始メテ其効力相齊シ之ヨリ以下ノ距離ニ於テハ歩兵ハ

砲兵ニ優ル故ニ歩兵ハ地形ヲ利用シテ成ル可ク砲兵ニ接近シ第一

ニ駕馬ヲ射撃シ次ニ砲卒ヲ射撃セマス

兵卒動作ノ概略

一兵卒ハ行軍及勞動ノ後戰鬪ニ移ルヲ常トス而シテ戰時ニ於テハ尙之

ニ缺乏ノ加ハルアリテ一層困難ヲ増加ス故ニ兵卒ハ剛毅勇猛思慮及

果斷ヲ有セサル可ラス此性質ハ最大危險ノ時ニ在テ兵卒ニ必要ナ

リ此性質ハ軍事教育ニ由テ其方鞏固ニシ獨斷ニ慣レ己レニ克ツトテ

勉メ且漸次ノ習慣ヲ以テ軀體ノ勞動ニ堪ヘ戰鬪演習ノ復習ニ由テ單
簡ナル方法ニ習熟スルキハ戰鬪ノ悲惨ナル感情ニモ撓マヌシテ以テ
自ラ任ヌキテ得可シ

二前進中兵卒ハ命令ナクシテ停止スルハ嚴禁ナリ火力熾大ニシテ殺傷
多キキニ在テモ亦然リ凡ソ退走ハ殲滅ニ陥ルモノニシテ之ニ反シ

テ猛烈果敢ナル攻撃ハ常ニ成果ヲ得ルモノトス

三防禦ニ在テ兵卒ハ其保ツ可キ位置ニ停止スルヲ要ス兵卒ハ敵兵接近
スルニ隨テ我火力ハ益々敵ヲ殺傷スルヲ多キヲ信用ス可シ故ニ散兵

ハ近距離ニ用ユル爲メ彈藥ヲ節用シ確實ナル成績アルニ臨ミ之ヲ使
用スヘシ

四戰鬪前後及戰鬪中常ニ彈倉中ニ彈藥ヲ充填シ置クニ注意シ彈藥ノ全
部或ハ一部ヲ射耗シタルキハ好機ヲ得ル毎ニ必ス之ヲ補填ス

五各兵卒ハ其所屬部隊ヲ離レタルニ注意ス可シ任務ヲ帶ヒヌ或ハ負傷
セヌシテ徒ニ戰鬪部隊ノ後方ニ停止シ又ハ命令ヲ受ケヌシテ負傷者

ヲ戰鬪中ヨリ連搬スル者ハ之ヲ逃亡罪ニ問フモノトス若シ其所屬部
隊ノ所在ヲ失フタル兵卒ハ直チニ最近ノ戰鬪部隊ニ合シ其將校若ク

ハ下士ノ命令ニ從ヒ之ニ服從スルヲ所屬上官ニ於ケル如ク可スシ而

シテ其所属部隊ヲ失フタル兵卒ハ戦闘終ルノ後直チニ之ヲ搜索スルヲ要ス

六戦闘喧噪ノ中ニ在リテ決心及思慮ヲ失フタル兵卒ハ其所属將校ヲ仰視スルヲ要ス既ニ此將校ノ現在セサルハト雖モ下士若クハ勇敢ナル兵卒ヲ表率スルハ以テ其身ヲ處置スルヲ得

第三章 步兵工作摘要

一般ニ掩堡ノ断面ハ左ノ要件ヲ充足スルヲ目的トス

小銃彈ノ侵徹力ニ抗スルヲ 兵卒ノ体軀ヲ掩蔽スルヲ

攻勢ニ轉ヌルヲ 防禦セサルヲ 構造簡易ニシ且迅速ナルベキヲ

馱載器具ハ步兵大隊ニ属スルモノニシテ其目的ハ稍大ナル工作ヲ施行シ或ハ携帯器具ノ不足ヲ補フニ在リ

副防禦トハ ○攻兵ノ行進ヲ妨ケ守兵ノ近距離射撃ノ下ニ務メテ長ク之ヲ阻滯スル諸障礙ニシテ其種類夥多アリト雖モ尤モ多ク使用スルハ鹿柴及鉄條網トス

第四章 雜則

狹窄射撃ノ利益ハ ○各種ノ照尺ヲ用ヒ諸種ノ姿勢ニ在テ射撃ノ規則ヲ活用シ又射撃ノ熟練ヲ維持スルニ在リ

射撃ノ種類四アリ ○獨立射撃 集合射撃 戰闘射撃 試驗射撃トス

射撃ノ等級ヲ四ニ區分ス ○初年兵及尙下手ヲ射撃手ハ皆三等トシ三等射撃手ヲ各習會ニ合格シタル者ハ二等射撃手トシ二等射撃手ノ各習會ニ合格シタル者ハ一等射撃手トシ第二種徽章ヲ有セル下士卒ヲ特別射撃トス

父母重病死亡等ニテ歸省ヲ出願スルハ其手順ハ ○戶主又ハ親族ノ者ヨリ事情ヲ詳記シ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ市町村長ノ與書証印ヲ以テ本人所属ノ隊ニ差出スモノナリ

右ノ事情ニテ歸省ヲ許サレタルハ旅費及日給ハ ○全ク自辨ナリ若シ往復ノ旅費ヲ辨ズル能ハサルハ歸省ヲ差止ム

歸省中本人病氣ニテ期日ニ飯營ヲ難キハ ○本人ノ願書ニ陸軍醫官若クハ地方病院醫師ノ診斷書ヲ添ヘ市町村長或ハ區長ノ與書証印ヲ請ヒ其所属隊ニ送呈スヘキモノトス若シ地方ニ陸軍醫官又ハ病院ナキハ治療ヲ受ル醫師ノ診斷書ヲ添ユルモノトス

第五章 創傷手當法

問 創傷手當トハ如何ナルヲナルヤ

答 兵卒戰場ニテ負傷セシ時醫官ノ來ルマテニ自カラ手當シ及ヒ他人

ノ創傷ヲ救護スルノ法デアリマス
 創傷ハ何ヲ以テ手當スルヤ
 兵卒出師ノ際繃帶包ヲ上衣ノ左裾裏ニ納メ置キ負傷セシトキ之レ
 ヲ以テ手當シマス
 繃帶包トハ如何ナルモノナルヤ
 赤色ノ綿紗三枚ヲ別々ニ疊ミ澁紙ニテ包ミ更ニ三角巾ヲ以テ之レ
 ヲ包ミ止針ニテ封シアリマス
 赤色ノ綿紗ハ何コ用ユルヤ
 創口ニ當テ其膿潰ヲ防グニ用ヒマス故ニ決シテ不潔ノ手指等ヲ觸
 レテハナリマセヌ
 繃帶包ノ用法如何
 先ツ之ヲ開キ赤布ヲ出シ其ノ疊ミ込ミタル面ニ手及ヒ其他ノ物ノ
 觸レサル様注意シテ創口ニ當テ三角巾ニテ其ノ上ヲ卷キ止針ニテ
 縫止メ或ハ其ノ端ヲ結び合セ置キマス
 頸巾狀帶トハ如何
 三角巾ノ尖頂ヨリ下線ノ方ニ向ヒ隨意ノ幅ニ疊ミタル物ヲ云マス
 頸巾狀帶トハ如何ナル創ニ用ユルヤ

答 眼耳額手足等ノ小サキ創ヲ卷キ或ハ骨傷ニ竹木等ヲ副ヘテ之レ
 ヲ固定スルコ用ヒマス
 問 頭ノ傷ヲ卷クハ如何スルヤ
 答 三角巾ヲ開キタルマ、其中央ヲ頭頂ニ置キ下線ヲ額ニ當テ兩端ヲ
 頭ノ後ロニ廻シテ組ミ違ヘ再ヒ額ニ戻シテ結び合セ後ロニ垂レタ
 ル三角ノ部ヲ折反シ頭頂ニ於テ止針ニテ止メマス
 問 胸ノ創ヲ繃帶スルニハ
 答 三角巾ノ中央ヲ胸ニ當テ尖頂ハ創ニ近キ方ノ肩ヲ越ヘ後ロニ引キ
 下線ニテ胸ノ圍ヲ纏ヒ兩尖尾ヲ左右ノ腋下ヨリ背ニ廻ハシテ結ヒ
 更ニ其ノ端ト尖頂ノ端トヲ結び合セマス
 問 背ノ創ノ卷方如何
 答 胸ノ傷ト全シ唯後ヨリ掩テ前テ結ブ違ヒガアリマス
 問 臂若シクハ脚ノ骨傷ニハ
 答 副木ヲ當テ二タ處ロ結縛シマス
 問 手及ヒ足ノ傷ノ卷キ方如何
 答 三角巾ヲ二ツニ疊ムカ或ハ切りテ小サキ三角形トナシ其ノ下線ヲ
 手頸ノ方ニ向ケ手ノ下ニ敷キ尖頂ヲ折リ反シテ手ヲ包ミ次ニ兩端

ヲ組ミ合ヒ手頸ヲ纏フヲ結ヒ合スノデアリマス又足ノ傷ヲ卷クノ
ハ手モ同様デアリマス

問 創口ヲ繃帶スルニ就テノ注意如何

答 勉メテ外氣及ヒ塵埃等總テ不潔物ノ創口ニ入ラサル様ニシマス

問 挫傷及ヒ挫創ヲナシタルトキハ如何スルヤ

答 挫傷ハ冷水ヲ手巾或ハ布片ニ浸シテ冷シマス又挫創ハ多量ノ清水
ニテ洗ヒ若シ水無キ時ハ洗ハズシテ繃帶包中ニアル赤布一枚ヲ以
テ其疊ミタル面ヲ創口ニ當テ其上ニ殘リノ赤布ヲ戴セ頸巾狀帶ヲ
以テ固ク之ヲ卷キ其端ヲ結合スルカ或ハ止針ニテ縫止メマス

問 截創刺創銃創等ハ如何スルヤ

答 先ツ衣ヲ脱ガシメ或ハ銃劍等ニテ衣服ノ創所ニ當ル所ヲ剪開キ
赤布ヲ創ノ大小ニ應ジテ一枚二枚又ハ三枚其創口ニ當テ頸巾狀帶
ニテ卷キマス又銃創ノ如キ創口ニツアルモノハ赤布ヲ一枚ツ、兩
方ノ創口ニ當テマス又創口ヨリ出血甚シキトキハ先ツ止血法ヲ行
ヒ後チ赤布ニテ創口ヲ被ヒ頸巾狀帶ニテ固ク卷キマス總テ手臂ノ
傷ハ右ノ法ヲ施シ更ニ胸ノ鈕ヲ外シ手先ヲ懷ニ入レテ創處ノ動カ
ス様ニ致シマス

問 挫創銃創等ノ骨折ヲ兼テタルモノハ如何スルヤ

答 創ノナキ方ノ面ニ樹ノ皮藁束薄板劍鞘等ヲ副ヘテ固ク繃帶シ又脱
臼スルトキハ成ルベク患部ヲ安靜ニ保チマス

問 咬創ハ如何スルヤ

答 咬創ハ多ク毒アル故ニ直ニ創口ニ口ヲ接ケテ毒氣ヲ吸取リ清水ニ
テ洗ヒ赤布ヲ貼リ三角巾ニテ卷キ更ニ創處ノ上部ヲ手巾等ニテ固
ク縛リ毒氣ノ全身ニ行キ渡ラヌ様ニ致シマス

問 火傷ハ如何スルヤ

答 皮膚唯赤色トナリテ灼痛ヲ覺ユルモノハ冷水ヲ注キテ輕ク包ミ又
水泡ヲ生ゼシモノハ其側縁ヲ針ニテ刺シ水ヲ漏シ又皮膚焦爛シタ
ルモノハ直チニ赤布ヲ貼リ三角巾ニテ卷キ總テ空氣ニ觸レヌ様注
意シマス

問 火ニ遭ヒ衣服焰燃スルトキハ如何スルヤ

答 徐ニ地上ニ伏シ轉輾シ之ヲ熄シ然ル後チ衣服ヲ脱シマス若シ衣服
ガ皮上ニ附着スルトキハ強テ之ヲ剝取ラズ剪刀ヲ以テ其ノ周圍ヲ
切取リ後チ繃帶シマス

問 止血ノ法如何

答 止血ノ法如何

答

創處ノ全面ヨリ徐ニ出血シテ其量少ク或ハ具色暗紅色ナルキハ赤布一枚ニテ創面ヲ覆ヒ指ニテ強ク壓シ血ノ止ムヲ見ハ更ニ他ノ赤布二枚ニテ創口ヲ覆ヒ後瀾帶シマス又鮮紅色ノ血飛ヒ出ツルトキハ容易ニ止メ難ク至テ危険デアリマス其時ハ先ツ赤布一二枚ヲ丸メテ出血スル所ニ當テ指ニテ強ク壓シマス若シ此法ニテ止マラザルトキハ創處ノ上部ニアキ動脈ノ通路ヲ壓シマス

問

其ノ動脈ノ通路ヲ壓ス法如何

指ノ出血ニハ其ノ指根ノ兩側ニ拇指ト示指トヲ當テ強ク撮ミマス
手背ノ出血ニハ上膊ノ力癆カ出來ル處ノ内側ニ在ル淺キ溝ニ示指
中指環指ノ三本ヲ當テ手掌ヲ前而或ハ後面ニ廻ハシ固ク握リ指頭
ニテ溝ノ處ヲ強ク壓シマス又傷者自ラ此法ヲ行ハントセハ拇指頭
ヲ力癆ノ内側ノ淺キ溝ニ當テ手掌ヲ前面ニ廻ハシ堅ク握リマス
上膊ノ上部或ハ腋窩ノ止血法ハ

問

頸ノ下銷骨ノ上部ニ在ル窩ニ拇指頭ヲ當テ深ク内下ノ方ニ向テ壓

シマス

問

口ノ近傍ノ出血ニハ如何スルヤ

頸尖ト耳朶ノ間ニシテ後ヨリ凡ソ三分ノ一ノ處ヲ骨ニ向テ強ク壓

シマス

問

脚ノ出血ニハ如何スルヤ

問

一般ニ鼠蹊ノ中央ノ下ニ於テ左右ノ拇指ヲ當テ、強ク壓シマス
長時間手指ヲ以テ壓迫セハ手力疲レ或ハ警官ノ所在地ヘ引揚グル
ニ至テ不便ナルトキハ之レヲ代ニ良法アリヤ

答

粟大ノ小石或ハ之ニ類スル者ヲ赤布ニ包ミ右ノ壓定部ニ當テ其上
ヲ手布等ニテ緩ク巻キ其間ニ劔鞘竹木等凡テ手近ニ在ル木棍等ヲ
挾ミ數々回轉シテ血ノ止ムルマテ緊約シマス

問

止血ニ就テノ注意

答

總テ出血ノ際ニハ成ルヘク創部ヲ高ク保持シマス

問

負傷者卒倒スルトキハ如何スルヤ

答

卒倒ハ多クハ腦貧血ニ因ル者故其儘下半身ヲ高クシ上半身ヲ頭
部ヲ低クシ上衣ヲ脱シテ胸部ヲ開テ冷水ヲ布片ニ浸シ胸部及ヒ顔
面ヲ拭フテ醒覺サセマス

改正兵卒教授書終

(名假片及名假平) 音十五

シ　ワ　ラ　ヤ　マ　ハ　ナ　タ　サ　カ　ア
 井　リ　イ　ミ　ヒ　ニ　チ　シ　キ　イ
 ウ　ル　ユ　ム　フ　ヌ　ツ　ス　ク　ウ
 エ　レ　エ　メ　ヘ　子　テ　セ　ケ　エ
 ナ　ロ　ヨ　モ　ホ　ノ　ト　ソ　コ　オ

ん　あ　ら　や　ま　え　な　た　さ　か　あ
 ゐ　り　い　み　ひ　に　ち　し　き　い
 う　る　ゆ　む　ふ　ぬ　つ　す　く　う
 ゑ　れ　に　め　へ　ね　て　せ　け　に
 を　ろ　よ　も　ほ　の　と　そ　こ　れ

附記

二四一

二四〇

數字

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
一	二	三	四	五	六	七	八	九	十

例

2	2	5	二百二十五		
1	4	2	2	一千四百二十二	
1	5	5	3	1	一万五千五百三十一

改正 在郷軍人須知 全

本書集録スル所ハ在郷軍人自己一身ニ付キ要スル件ハ悉ク之ヲ網羅シテ漏ヌ所ナシ而シテ其ノ願届出チ要スルモノハ一々其ノ書式ヲ示シ且規則ノ條項ヲ附記セリ

從來各書肆ニ發賣スル此類書ハ其數充棟啻ナラスト雖モ多クハ營利的ニ流レ利ヘ廿九年及三十年ニ於テ右條例規則ハ全ク改正セラレ爲メニ其以前ノ出版書ハ陳腐ニ屬シタル者ヤ且是迄下士以下諸士ノ進達書類中ニハ不備ノモノ多ク加之或ハ規則ヲ熟知セサル等ヨリ往々陷罪者アルチ歎シ之ヲ編纂シタリ尤モ本書ハ編者其稿ヲ草スト雖モ尙其遺漏誤謬ナカラシテ期シ親ク其筋ノ主ナル職員ノ添削及其他ノ校閲ヲ經タル書ナレハ事實チ正確ニシ且執務者ノ煩チ殺クヤ疑ヲ容サルナリ

發行元

近藤喜保商店

營業品概目

軍隊需用諸品
活版印刷及圖書出版
和洋諸紙筆墨文具類
諸官衙用印刷物
昌榮社及兵林館圖書
測量部御出版地圖
小林川流堂出版圖書
官衙用消耗品雜具類
博文館發兌圖書雜誌

軍事新報社出版書籍
兵書會社出版圖書類
厚生堂及武揚堂圖書
博愛館及鐘美堂圖書
石版畫額面盃掛軸類
軍用雜貨、諸日用品
兵事雜誌社出版圖書
石鹼靴墨兵器用油類
洋式帳簿、和洋製本

陸軍諸官衙御用達
兼御用書肆
姫路市東魚町

軍隊諸官衙
御用印刷所
全市全町

近藤喜保商店

近藤喜保印刷部

明治三十二年十月十八日印刷
明治三十三年十一月廿三日發行
明治三十三年十一月廿五日增訂再版
明治卅四年十一月十五日發行
明治卅四年十一月廿二日發行

正價金拾壹錢



著作權所有

編纂兼發行者
近藤喜保
姫路市東魚町二十二番屋敷

印刷者
岡田勝太郎
姫路市東魚町二十二番屋敷

印刷所
近藤喜保活版部
姫路市東魚町二十二番屋敷

發賣所
近藤喜樂堂
姫路市東魚町二十二番屋敷

146
659

特約賣捌所

東京市神田區今川小路二丁目
 同市神橋區南傳馬町一丁目
 同市神田區大鋸町
 同市京橋區大鋸町
 同市吳服町六丁目
 靜岡市名古屋市本町二丁目
 愛知縣豐橋市中八丁目
 大坂市本町二丁目
 群馬縣高崎連雀町
 靜岡縣高崎連雀町
 宮城縣仙臺市大町二丁目
 烏取縣鳥取市立川町一丁目
 廣島縣廣島市猿樂町
 兵庫縣姫路市平野町
 福井縣鯖江市深江町
 福井縣敦賀市粟野
 人津市湊町
 鳥取市上魚町
 金澤市尾張町
 伏見字風呂尾
 此外各兵營所在地書店ニ在リ最寄ニテ御購求ヲ乞フ

博愛館
 厚生堂
 靜陵館
 金城堂
 豐川堂
 白川堂
 博文堂

伊藤政三
 相澤富
 佐藤揚
 武本永二
 杉本永二
 井田市太
 竹內
 鶴澤內
 佐藤幸久
 太藤陽
 三澤好
 丹羽
 神代賤
 大明石彦
 大谷幸
 上田倉
 太田支
 山本吉太
 雲本園
 公本園

終

